

2017年8月25日 8月26日修正 9月17日補足 2018年7月25日微修正
11月16日付記

『隠州視聴合記』と『改正日本輿地路程全図』における竹島の記述・描写に関する私見 訂正・補遺

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

1 まず訂正である。本篇では、赤水の日本図の重版が1846年と1871年にもなされたと記しているが、これは正しくない。『改正日本輿地路程全図』の書誌学的研究の決定版である[馬場 2001]がたまたま手元に見当たらず、これを参照しなかったためにこのような基本的なミスをしてしまった。

2 本篇では、『改正日本輿地路程全図』が日本だけを描こうとした地図であることを強調した。それならば、その地図になぜ釜山近辺が描かれているのか？この点について、本篇執筆時には、この地図上では経緯線で位置が指定されているので、その位置指定の原則に基づいて朝鮮半島の突端がわずかばかり地図のフレーム内に入ってくるのを敢えて除外しなかったのではないかと漠然と考えていた。

どうやらそうではないようである。『改正日本輿地路程全図』は、その表題にも示されているとおり、日本全国の道路地図である。当時の全国的な道中記類を見ると、釜山を含めるのが常識であったことが知られる。赤水をその常識に従っただけなのである。

釜山は、日本の路程の末端として認識されていた。『大日本道中行程細見記』（1770年、国会図書館デジタルライブラリー）の凡例には

一、西ハ從朝鮮釜山海・対馬・壱岐・五島・平戸・長崎等、東ハ到奥仙台・盛岡・弘前・津軽・松前・蝦夷ノ渡口、其間往来ノ馬次・道筋・船着等、都テ大略ヲ記シテモルルコトナキガゴトシ

とある。下記のような道中行程の絵図に釜山までのルートが描かれているのを見ることができる。

『大日本道中行程細見記』（1795年）[日本地図選集刊行委員会編 1971]

『大日本道中行程細見記大全』（1837年、早稲田大学古典籍総合データベース）

『大日本道中細見絵図』（1847年、早稲田大学古典籍総合データベース）

『諸国道中旅鏡』（1848年、国会図書館デジタルライブラリー、[小泉 2004]）

『大日本行程大絵図』（1865）[日本地図選集刊行委員会編 1971]

対馬藩の出先機関である倭館の置かれた釜山が日本の道路の末端とみなされ、それを道中行程の絵図に描くのは普通のことであった。赤水は、日本地図のなかに近隣の朝鮮も含めて描こうとしたのではなかった。朝鮮領ではあるが、道中記的には日本の端とみなされる地

点を描いただけであると考えられる。

すなわち、釜山も「竹島」(現鬱陵島)・「松島」(現竹島)もともに日本の端として『改正日本輿地路程全図』に書き込まれたといえる。根拠は異なる。釜山は、道中記的基準での日本の末端として地図に含められた。また、本篇の私の議論が正しければ、隠州の離れ小島である「竹島」「松島」が日本の西北の端であるという『隠州視聽合記』の判断を採用して、この2島が地図に書き込まれた。

3 地図の彩色の問題にも触れておこう(ただし、私は色弱なので、思わぬ間違いをしているかもしれない。その節はご海容を請う)。所謂「改正版」、「改正版」に準ずるとされる『兵家紀聞』付図、代表的な模倣版である『大日本国郡輿地路程全図』の彩色のパターンを取り上げる。

赤水は、1768年(明和5年)に原図を完成し、1775年(安永4年)に柴野栗山の序を得た(安永4年版があるかの如き記述があるが、それはおそらく刊行年が無く序の年次だけが記された海賊版的なものであろう)。1778年(安永7年)に官許を得、1779年(安永8年)に初版が出版され、その後4回の重版が行われた。これを「改正版」と呼ぶ。下記に閲覧しやすいものを挙げておく。

安永8年(1779)初版

[海野ほか編 1972]、《明治大学蘆田文庫 9-72-1》、《岡山大学池田文庫絵図公開データベースシステム》、《京都大学附属図書館(京都大学学術情報リポジトリ)》

寛政3年(1791)再版

《早稲田大学古典籍総合データベース》、《明治大学蘆田文庫 9-70-1;9-70-2》

文化8年(1811)三版

《岐阜県図書館 古地図の世界》

天保4年(1833)四版

[小泉 2004]

天保11年(1840)五版

《明治大学蘆田文庫 9-73》

「改正版」には彩色されたものも無彩色のものもある(値段が異なる)。彩色されたものに関しては、日本の端は彩色しないという原則が見られる。そのため、釜山も「竹島」「松島」も「永良部島」(口永良部島)も「青島」(青ヶ島)も彩色されていない。赤水は日本の端の問題には常に意を払っていたようであり、初版では西南端にあった「鬼界島」が再版で除かれ、初版では八丈島のすぐ隣に描かれていた「青島」が再版の何刷り目かでより南の位置に動かされている。

『兵家紀聞』付図と称されるものには、栗原信充が自らの著作の附録として赤水図を印刷

させたことが記されている。

弘化3年(1846)刊

《早稲田大学古典籍総合データベース》

概ね「改正版」を踏襲しているが、変更も加えられている。彩色の方針も異なっている。釜山近郊と「竹島」「松島」に別の色で彩色がなされている。釜山近郊の色は他の場所では使われていない。「竹島」「松島」と隠岐の島は同じ色である。釜山は行程の末端ではあっても日本領ではないということで独自の色にしたのかもしれない。「竹島」「松島」と隠岐島の色をそろえたのは、「竹島」「松島」が隠岐に属する離れ小島であるという認識が民間に確かに存在していた(それは『隠州視聴合記』に由来するものであろう)ことを示しているように思われる。

『大日本国郡輿地路程全図』には、長久保赤水原図、鈴木驥園増訂と明記されている。

嘉永5年(1852)版

《明治大学蘆田文庫》《横浜市立大学所蔵古地図データベース》《神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズ》

明治4年(1871)版

《早稲田大学古典籍総合データベース》《明治大学蘆田文庫》

明治に入ってから再刊されており、それなりに普及したものであろう。これもまた別の彩色の方針を採っている。日本の周囲の多くの離島に同じ色で彩色がなされている。その結果、釜山附近と「竹島」「松島」の色は別のものとなっている。

このように地図製作者たちは、地図の彩色に様々な工夫をこらしたようであるが、「竹島」「松島」が日本以外の何かであることを示そうとしたとみなしうる明白な形跡はないようである。

1867年(慶應3年)に伊能図にもとづく「官板実測日本地図」が刊行された。近代日本の空間的範囲を確定しようとしたもので、そこから竹島は除外されている[杉本 2016]。幕府倒壊後、1870年(明治3年)には大学南校から同じものが刊行されている。しかし、上記のとおり、その翌年に「竹島」「松島」を明記した『大日本国郡輿地路程全図』が再版されている。この時期、政府の空間意識と民間の空間意識は必ずしも同じでなかったのであろう。

海野一隆ほか編. 1972. 『日本古地図大成』東京：講談社.

小泉吉永. 2004. 『諸国海陸旅案内：江戸時代古地図・古文書で愉しむ』東京：人文社.

杉本史子. 2016. 「地図・絵図の出版と政治文化の変容」横田冬彦編『出版と流通』東京：平凡社.

日本地図選集刊行委員会編. 1971. 『徳川治世諸国道中細見絵図集』東京：人文社.

馬場章. 2001. 「地図の書誌学：長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合」黒田日出男ほか

編『地図と絵図の政治文化史』東京:東京大学出版会

付記

長久保赤水の『改正日本輿地路程図』およびその模倣版の改版過程について、海田俊一氏が詳細・綿密な研究を公表しておられることに最近になってようやく気がついた[海田 2017a; 2017b]。迂闊なことでもことに恐縮である。

この研究から次のことが確認できる。

- ・赤水図の初版と第二版において赤水はくりかえし改訂を行い、その地図をより正確なものにしようとしていたこと。
- ・非常に多様なバージョンの赤水図が存在し、彩色のパターンも様々であったこと。
- ・青ヶ島が八丈島附近から分離されたのは、第二版（寛政 3 年版）の四訂版からであること。

海田俊一. 2017a. 「改正日本輿地路程図（赤水図）の改版過程」『流宣図と赤水図：江戸時代のベストセラー日本地図』東京：アルス・メディカ

海田俊一. 2017b. 「赤水図の模倣版などについて」『同』